

歴史よもやま話 その7.

吾妻鏡に登場する静御前

現在NHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」を放映中だが、この話の土台になっているのが鎌倉幕府の正史・吾妻鏡である。この吾妻鏡に、ほんのひととき、九郎判官源義経の妾・静が登場する。

吾妻鏡第5巻文治元年11月の記録に「予州（義経）大和国吉野山に籠もるの由風聞（中略）予州の妾静、当山藤尾坂より下り蔵王堂に至る云々」

義経は鎌倉幕府の追求に海路九州に逃れようとするが難破して果たせず静を伴って吉野山に入る。しかし途中はぐれてしまい、静は捕まり京都に連行される。

「北条殿（時政）の飛脚京都より参着す。（中略）予州の妾出来す。相尋ぬるところ、予州出でて西海に赴くの暁云々」静は、当時京に駐在していた北条時政の尋問を受けている。

「今日、予州の妾静、召によって京都より鎌倉に参着す（中略）母磯禪師これに伴う」

鎌倉で静は義経の行方を尋問されるが、吉野山では女人が入山を許されず、行方はわからないという。そんななか、「静女の事、子細を尋ね問はるといへども、予州の在所を知らざるの由（中略）当時からの子息を懐妊するところなり」静は義経の子を身籠っていたのである。

文治2年4月になって、「二品（頼朝）ならびに御台所（政子）、静女を回廊に召し出さる。

これ舞曲を施さしむべきによってなり云々。」頼朝は静に、神殿に舞を奉納せよと命ずる。

病身の故と断るが、政子に諫められ謳い舞うことになる。「しつやしつしつのおだまきくり返し昔を今になすよしもがな」と義経を偲ぶ想いを唄う。これを聴いて頼朝は「反逆の義経を慕ふとは奇怪なり」と怒る。政子は「君流人として豆州に坐したまふの比、（中略）暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎ、君が所に到る云々」と、貴方が伊豆に流人としているとき、（私は父親の監禁を破って）、暗い嵐の夜、貴方のところに駆けつけたではありませんか。恋しい人を慕うのは貞女の心情なのですよ と言って頼朝の怒りを鎮めた。

「左右衛門尉祐経ら（中略）面々に相具して静が旅宿に向ひ、酒を遊び、宴を催し（中略）

景茂数盃を傾け、いささか一酔す。この間艶言を静に通ず。（中略）静落涙して云はく、予州は鎌倉殿の御連枝、われはかの妾なり。云々」とし、義経がここに居れば、御家人の貴方が私に会うことさえもできないのになにごとかと涙ながらに訴えた。

7月になり、静は男子を出産する。「男子たるにおいては（中略）いかでか将来を怖畏せざらんや」として、泣き叫び赤子を抱え込む静から赤子を奪い取り、由比の浦に捨てる。

9月になり、「静母子、暇を賜はりて帰洛す。御台所ならびに姫君憐憫したまふによって、多く重宝を賜はる」静は母・磯禪師とともに京都に帰る。

以上が「吾妻鏡」に記録された静に係る記事の幾つかである。義経と生き別れたのち、鎌倉での静の姿は頼朝に舞を強要され、義経への慕情を唄ったとして怒りをかたり、酔っ払った御家人たちに艶言を投げかけられるなどの恥辱を受け、最後は産み落とした赤子を取上げられ殺されるなどいかにも哀れである。御台所・政子はそんな静を庇い、怒る頼朝を宥めたり、帰洛するときは沢山の財物を授けている。

このあと、帰洛後の彼女の消息は不明である。

幾つかの静伝説が今日に伝わっており、このうち、静が義経の跡を慕って奥州に向う途中で足跡を残したというものに、久喜市栗橋の「静女の墳」と「しずか桜」、古河市下辺見の思案橋などがある。栗橋では毎年10月に「静御前まつり」が開催され、市民が義経・静・白拍子などに扮したパレードが行われているという。